

グレアム・グリーン再考

—そのシレンマをめぐって—

高 山 翠

I

グレアム・グリーンは通常カトリック作家と呼ばれてきた。もっとも、グリーン自身はそう呼ばれることを好んでいないということも今日周知の事実であるけれども、作家自身の好き嫌いはさておき、カトリック作家という名が作家としてのグリーンの本質を最もよく言い当てた呼び名であるのかどうか問題とされねばならない。確かに彼の主要な作品においてカトリック信者とその信仰にかかわる問題が題材となっているし、又単に題材というにとどまらず、カトリシズムが作品を支える思想の一つとして現われていることも否定できない。しかし、ジョン・アトキンズも「グリーン⁽¹⁾のするあらゆることの中にアンビヴァレンスが見られる。」と述べているように、グリーンは多面的な、ある意味では矛盾撞着の多い作家なのだ。それ故、カトリシズムが彼の作品の最も本質的な部分だとして、神学的な面のみを重視するならば、作品の理解を一面的なものにするおそれもある。

もっともカトリシズムといっても、グリーン⁽¹⁾の作品におけるそれが必ずしもオーソドックスなものでないことはつとに指摘されているところであるが、その非正統性をどのように評価するかは又新たな問題を提示することになる。グ

リーン自身、時として同じ陣営に属するとみられがちなT・S・エリオットなどとちがい、その非正統性をふりかざすような傾向があるし、カトリックであるとしてもアンチ・ヒューマニストではなく、一面極めてリベラルであり、心情的にはむしろアナーキックでもあった。そのジャーナリスティックな発言においても、唯物思想を非難してカトリシズム擁護のために弁じたのも彼なら、後進国における人民戦線や коммуニストの活動に意外な程の同情や理解を示したのも事実であり、共産主義政権によるカトリック教会の弾圧に抗議するかと思うと、その教会が反動的な勢力と結びつきがちであるとしてプロテストしたのも彼であった。

勿論一般的に言えば、作家の個人的な思想と作品の思想とを直線的に結びつけてしまうことは危険であるが、グリーンの場合、日記や旅行記、レポート等に表れている彼自身の思想的多面性ないし矛盾は、むしろ驚くほど直接的に作品に露呈しているのである。もとよりそれが哲学でも神学でもなく文学である以上、思想的矛盾は必ずしも大きな欠陥とは言えない。二律背反から生ずる緊張が、時には不統一な脆さを感じさせもするが、時には秀れた迫力を作品に与えることもあるからだ。以下彼の作品に内在する矛盾の一端を指摘して、その矛盾の中にグリーンの本質をさぐってみたいと思う。

II

グリーンの短篇集『二十一の短篇』の中に「パーティーの終り」と題する秀れた一篇がある。非常に仲の良い双子の兄弟がいて、お互いの感情もテレパシイのようにわかる。この二人は何もかも瓜二つなのだが、双子とはいえ、一応兄であるピーターは、恐がりの弟フランシスに対して保護者的な気持を抱いている。このフランシスは暗闇に対して非常な恐怖を感ずるので、子供パーティーの最後に部屋を真暗にして行われるかくれんぼ遊びがこわくてたまらな

い。ある時また無理やりに行かされたパーティーでプログラムも最後となり、広間の灯がすべて消される。子供たちは思い思いの所に隠れるが、暗闇の底のどこかで恐怖と絶望に金縛りになってうずくまっているフランシスの激しい動悸が、別な所に隠れているピーターには自分のことのように感じられる。弟が可哀そうでたまらぬピーターは傍へ行ってやろうと暗闇の中を手さぐりで探しまわる。そしてゲームが終って再び灯がともされた時、人々の見たものは、弟を案じて探しに来た兄の手に触れられて息絶えたフランシスの姿であり、このパラドックスを十分に理解し得ぬまま、死んだ弟の手を握りしめて呆然としている幼い兄の姿であった。

1929年といえば、グリーン作家としてのキャリアが始まった年に書かれたこの短篇の中には、後の彼の諸作品の原型となる世界が象徴的に表わされているといえる。即ち、灯の消えた広間こそは人間のおかれた暗黒の世界なのだ。そしてそれに怯える人間の恐怖もさることながら、更に悲劇的なのは、その恐怖を理解し憐れんで助けようとする者の、まさにその手によって破局がもたらされるというパラドックスである。グリーン作品において、人間の弱さや苦悩を理解しようとしないう冷たさは常に厳しく非難されているのだが、他人の苦しみを己が苦しみとして手をさしのべる者によってすら、ひとは救われぬとすれば……。ここにグリーンにつき当った不条理があり、この「絶望の領域」から彼の文学は出発したと考えられるのである。

盲人が盲人の手を引いて二人ながら穴に落ちねばならぬ、この人間存在の絶望的不条理に直面した時、グリーンの世界にカトリシズムが登場する。フランソワ・モーリアックは、グリーンがこの不条理こそ実は神の不可思議な愛のあらわれであることを啓示しようとしているのだといひ、キャスリーン・ノットは、それこそいわゆる *deus ex machina* であり、ドグマティックな解答を与えるにすぎないと言ふ。こうなると要するに批評する側の世界観の問題になっ

てしまうのだが、ただここで最も注意せねばならないのは、そうした読む側の主観の相違ということを離れても、彼の作品におけるこの「絶望」自体が、実は意外に多義的な、あるいは曖昧な性格を持っているということである。それは単に、神なき世界の暗黒、「まことの光」に照らされて消えさる闇、というだけのものではない。事実グリーン作品は、『権力と栄光』の警部や、『情事の終り』のベンドリックス、『おとなしいアメリカ人』のファウラーにおけるが如き「神なき人間の不幸」を描いているのみならず、『権力と栄光』のウイスキー神父や、『事物の核心』のスコウビイの如き信仰者の絶望にも満ちているからだ。これらのカトリック教徒は、信仰そのものには疑いを抱いていないにもかかわらず、自らの信ずる神によって自分が救われるとは思っていないかのようだ。彼等は信仰による新生の希望を持つ代りに、自らの墮地獄を信じさえするのである。

カトリックの教義によれば、絶望は許されざる罪だといわれる。しかし『事物の核心』の中の言葉を借りて言えば、それは「腐敗した人間や邪悪な人間は決して犯すことのない罪」であり、「善意の人間のみが常に心の内にこの墮地獄の罪をうける可能性をもっているのだ」という。そしてグリーン定義によれば、善意の人間とは自分の果し得ない責任を自らに課する人間であるというのだから、挫折と絶望は人間の善良さの必然的帰結ということになる。彼の作品において、カトリック信者たちは、しばしば絶望の最も窮極的なかたちである自殺ないし自殺的行為を敢えてする。『事物の核心』のスコウビイの計画的自殺はその典型的なものであろうが、より曖昧で未遂に終るにしても『ブライトン・ロック』のローズの心中行があり、『情事の終り』のサラ・マイルズの死も、彼女が医療の手を頑として拒んだが故であるからには、一種の自殺的行為ともいえるし、戯曲『居間』のローズ・ペンバートンも毒をあおって死ぬ。しかも、自殺という最も絶望的な罪を犯した人々に対して、作中の神父た

ちは常に極めて同情的であって、例えば『居間』のブラウン神父は、ローズの死後、「彼女が絶望することのできる人間だったからこそ」我々は彼女を愛したのだと言い切るのである。しかし、前述の如く、カトリック信者にとって絶望は罪であり、そして罪とは「神学的に言えば、いわば神から切り離された状態であるともいえる」⁽⁴⁾とすれば、彼の作品における「絶望」が、果して人間の崇高さの輝き出でる blessed darkness なのか、それとも神から切り離された人間の damnable condition なのかは、極めて微妙な問題となつてこよう。もっともこうした絶望の ambiguity ということならば、必ずしもグリーンだけの特質とは云えないかもしれぬ。しかしこの ambiguity が、グリーン作品における一つのオブセッションとも言うべき「憐憫」の取扱いと結びついているところに彼の一つの特徴があると考えられるので、以下、「絶望」の問題を追求するためにも、この「憐憫」について再考してみたい。

III

グリーンが描く世界は決して明るい世界ではない。その挫折と苦悩と罪の世界を、多くの批評家はいくらかの揶揄をもこめてグリーンランドと呼んできた。しかし、一見極めてペシミスティックな認識の上にたてられているかに見えるこのグリーンランドが、決して冷やかで荒涼たる世界ではなく、実は善意の罪人たちの不幸な愛や祈りや憐憫にも満ちみちているという事実を見逃してはならない。特にグリーン作品をひたしている最も濃密な感情は「憐憫」なのである。

自分を殺そうとした男にさえ憐れみを感じる『密使』の主人公Dは「作家のように呪わしくも他人に同情せずにはいられぬ」人間だったし、『ここは戦場だ』のコンラッド・ドローヴァが兄嫁と関係を結ぶのも、欲望からではなく憐れみの感情からであったが、彼は子供の時から、宣教師の映写するスライドの

上の飢えたアフリカの子供の姿にまで耐えがたい程の責任を感じずる男だった。『恐怖省』のアーサー・ロウも他人が苦しんでいると感ずるだけで平静を失い、「そんな時にはひとの為にどんなことでもしてやろうと思う」男であったからこそ、病に苦しむ妻を隣んで安楽死させたのであった。『情事の終り』のサラも、『居間』のローズも他人の苦しみに耐え得ない女だったし、『おとなしいアメリカ人』のシニカルなファウラーも、結局無辜のベトナム人への憐れみに動かされて自分の手を汚すことになるのである。

勿論この憐憫の主題も、作品によって少しづつニュアンスがちがうから、全く同一視してしまうことはできないにしても、他人の苦痛を坐視し得ず憐憫に動かされた人間が、何らかの決定的な行動に追い立てられ、あるいはまきこまれて行くという点で、多くの作品が共通なのである。（善意の人間というには程遠く「地獄の観念に殆んど正当性を与えるほどの悪人」⁽⁵⁾である『ブライトン・ロック』のピンキーの内にとすら、少女ローズへの憐憫の芽ばえが示唆されていることも見落せぬ事実である。）

中でもこの憐憫の問題を最も徹底的に追求したのが『事物の核心』であろう。主人公スコウビイは、彼にとっては文字通り「死に至る病」であるところの憐れみに憑かれた男である。彼は自分の妻への憐れみと愛人への憐れみに追いつめられて聖体を瀆し、遂には自殺するに至るのだが、それは単に三角関係の清算と云うべきものではない。妻や愛人のみならず、おおよそ彼の目にふれ耳に入る人間すべての苦しみがスコウビイにとっては耐えがたいので、そのためとあらば行きずりの人間の為にすら、自分の魂の平安を永遠に捧げると祈ることも、警官の身でありながら法律を犯すことも辞さない男にとっては、絶望はいずれにしても避けがたい運命だったとも言えるのである。彼は考える。「もし事実を知ったならば、ひとはあの星々に対してすら憐れみを感じなければならぬのだろうか。もしも、いわゆる事物の核心に到達したならば。」

この宇宙的憐憫とでも言うべき憐れみこそが、カトリック神学にもましてグリーン⁽⁶⁾の作品の「核心」に根づいていると思われるのである。しかしこの憐憫は、必ずしもそれ自体においてキリスト教的愛徳であるとは限らない。時には宗教的というよりはむしろあまりに人間的な感情であり、センチメンタリズムやひとりよがりの負け犬好みとも容易に結びつくものだ。ウィリアム・バーミンガムの「憐れみは神なき人間の倫理」という解釈や、W・H・オーデンの「愛と同情 (compassion) の腐敗したパロディ⁽⁷⁾」という批評を引くまでもなく、グリーン自身が、憐れみは人間的な高慢と結びついており、スコウビイは人生を自分の力で左右せんとする高慢によって死に定められたのだと語っている⁽⁸⁾のである。しかし、少くとも作品の中では、彼は憐憫と愛との峻別には成功していない。確かにスコウビイの場合に限らず、彼の作品において憐憫が、破壊的なもの、「あらゆる情熱の中で一番恐ろしいもの⁽⁹⁾」として描かれている面を見逃すわけにはいかないが、そうした場合ですら尚、これら憐れみの虜となった人間に対し、作者の憐れみも又惜しみなく注がれていることは明かなのである。憐憫が少くとも他人の苦痛への敏感さと結びついているからには、仮にそれが歪んだ、貧しい、時には墮落した形に過ぎなくとも、やはり広い意味での愛の変形であることを、結局グリーンは否定しきれなかったのだと考えざるを得ない。憐憫が美德であろうと悪徳であろうと、グリーンの世界においてそれは少くとも一つの「人間の条件」となっているのである。このあまりに人間的な憐憫の感情に対する彼のアンビヴァレントな、あるいは曖昧な態度が、前に述べた「絶望」に対する曖昧さとも結びついていくのである。何故ならば前に挙げたような作中人物たちは、愛や憐れみに駆りたてられるが故に人間の苦悩と恐怖にまきこまれ、「絶望の領域」へと追いやられて行くのだから。それは神なき人間であろうとカトリックであろうと変りはない。人間らしくあろうとすれば、いずれこの暗黒の淵に下りてゆくしかない⁽⁹⁾とグリーンは語っているかのよ

うだ。この思想を煮つめてゆけば、自殺という大罪、即ち絶望の最も極限的な状況を通じてこそ神の恩寵が働くかのような、神学的に言えば明かに偏った論理が、彼の作品にしばしば現れることにもなるのである。

それにしても、こうして絶望の淵に落ちることによってしか救われないとするようなグリーンのおブセッションが、悔い改められざる絶望は墮地獄の罪という教義と結びつく時、「神の国に入る為には地獄に墮ちねばならぬ」という奇妙なパラドックスが成立することになる。勿論グリーン^の指摘を待つまでもなく、キリスト教の本質自体がある程度こういうパラドックスを含んでいることは否定できない。しかしすべてのパラドックスがそうであるように、刃物の上を渡るように微妙なバランスの上に成立しているこのパラドックスも、グリーン一流のメロドラマティックな絶望の強調によってそのバランスを失う時、主客転倒する危険をはらんでいる。スコウビイやウイスキー神父において強調される墮地獄の確信は、神の喜び給う「砕けたる心」の謙虚さを通り越しており、この確信こそが信仰者のめざさねばならぬもののようにみえる程だ。これは、少くとも正統的なキリスト教の教義からすれば、やはり主客転倒と言わねばなるまい。

もとより文学は神学の焼直しではないのだから、教義的な破綻が必ずしも欠点とは言えない。むしろこの教義的破綻の中にこそグリーン文学の本質が露呈していると考えたい。何故ならば、破綻をもたらしたのはキリスト教自体の逆説的性格と云うよりはむしろグリーン自身の持つ本質的な矛盾であり、二律背反であると思うからだ。彼の作品におけるおブセッションな心情である「憐憫」に対して示されたグリーン^のジレンマは、次にとり上げる罪意識の問題において更に明確に表れてくるのである。

グリーン作品で重要な意味を持つ登場人物の多くは「絶望することのできる」人間であった。そしてその中でも絶望する度合の大きい者は罪を犯した人間ということになって、彼の主要作品の主人公たちが、宗教的な意味においてのみならず、現実に殺人、密輸、スパイ、詐欺、姦通などの罪を犯した人間であることは当然のなりゆきかもしれない。罪を犯したものの程罪の意識は深く、神を求める心も痛切であるという。しかしグリーンは罪の重視はその程度の穏やかなものではない。今日彼の作品における罪の偏重を指摘することはありふれたことになってしまったが、罪の美化は怪しからぬとするもの、反対にそれは宗教的偽善やブルジョワのお体裁主義への反動だと弁護するもの等その立場はさまざまである。後者の意見も確かにグリーンの一側面を指摘しているにはちがいないが、反動というものがえてして行き過ぎになりがちであることも否定できない。こうした行き過ぎを指摘しようとすれば、初期の「娯楽物」から「カトリック小説」、そして最新作の『伯母さんと旅』に至るまで数多くあるのだが、ここでは『権力と栄光』の中から一例をあげるにとどめよう。

囚われたウィスキー神父は、彼を悪い司祭だと面話し、又獄中の暗闇で快楽の呻きをあげる男女を醜いけだものだと非難する信心にこり固った女に反駁して、「そんなことを信じてはならないよ。そんな考えは危険だ。何故なら我々は突然自分の罪が多く、美しさを持っていることが分るからだ。」という奇怪な言葉を吐く。これは「悪い」破戒僧の放言にすぎないと片づけるわけにはいかない言葉なのである。何故なら、これこそ彼の作品に表われている人間の罪の認識を、包括的にそして適確にあらわした言葉だからだ。彼は更に続ける、「私は経験から知っている。サタンが墮落した時、どれ程多くの美しさもたらされたかを。」

これはもはや正統的なカトリシズムではない。強いていえば「罪の美学」とでも言うべきであろうか。しかし、こうした罪の嗜好が結びつきがちな、正統

信仰のうらがえしたる悪魔主義もここにはない。何故なら全篇を通して見れば、ウィスキー神父が少しも神を冒瀆しようとしているわけでないことは明らかなのだから。彼の場合、破戒の大罪を犯してはじめて、同じく罪にまみれた弱い存在であるところの人間に対する愛がめざめた、人間の真の美しさが分ったということなのである。即ちグリーンの場合、罪の嗜好は、人間の不完全性に対するペンミスティックな、或るいは宗教的な認識よりも、むしろ人間性に対するヒューマニスティックな、ある意味ではロマンティックな見方と結びついている面があるのではないか。T・E・ヒュームは、人間は限界のある不完全な存在であり、本質的に悪いものであると⁽⁶⁾いった。グリーンも又人間の不完全さや罪を繰り返す描くのであるが、この罪深さを悪とするより、むしろ「多くの美しさをもつ」ものとして強調する時、グリーンの神学は倒錯した人間讚美にまでふみこんでいるのではないか。

これに関連してもう一つ注目すべきことは、グリーンの好んで描く罪びとたち、特に「カトリック小説」の主人公たちは、しばしば自分が神の前に墮地獄の罪びとであると思っているにもかかわらず、その強い罪の意識の原因が意外に曖昧であるということなのだ。彼等は他人の苦しみに耐え得ない人間でありながら、自分がその苦しみの原因とならねばならぬ時、強い責任を感じて悩みはするが、奇妙なことに彼等は（そしてこのことが最も重要なことだと思われるのだが）自分が現実に犯した罪、例えば姦通や違法行為そのものを恥じたり悔いているわけではないのである。

それは、『ブライトン・ロック』のピンキーの場合は例外であるとしても、彼等の罪なるものが何らかの形の愛と結びついているからではなからうか。スコウビイは憐れみの為には嘘に嘘を重ね、法律を破ることに別段自責の念は感じないし、聖体を瀆すことはあれほど恐れても、ヘレンとの不倫の愛そのものは決して痛悔しないのである。サラ・マイルズも、一たび結んだ神との約束

故に情人ベンドリックスを思い切ろうとして苦しむが、夫ある身で彼と情事を重ねたこと自体を恥じて悔いているわけではない。ウィスキー神父が「私は後悔しない」と殆んど誇らしげに公言するのは、百姓女に生ませた自分の不義の子が愛しくてたまらないからであり、彼にとっては「自分のそもそもの罪は大して重要とは考えられない」のである。しかも彼は「自分の罪を愛したら、その時こそ我々は地獄に堕ちねばならない。」と考えるのだ。即ち彼等は、自分の人間的な愛を罪であると感じて恥じることができないが故に、罪の意識を持つのだともいえるのである。

この屈折した罪の意識の中に、グリーン文学の窮極的なテーマである「愛」（憐憫をも含めて）に対する作者のジレンマが、最も尖鋭に表れていると言わねばならぬ。サラの言うところの「ありきたりの墮落した人間の愛」が、いずれは神への愛につながって行くものなのか、それとも人間的な愛と神への愛とは所詮非連続なものであるのか——この問いに対してグリーンは一つだけの答を選ぶことができなかったのではないか。作品によってその答が異っているばかりでなく、一つの作品の中でさえ、主人公たちは二つの答の間を揺れ動いているのである。このジレンマが極度に緊迫したかたちで表れているのが『事物の核心』であろう。「教会の教えがどうであろうとも、愛は——どんな種類の愛でも——いくらかは慈悲を受けるに値するという確信を我々は持っているのだ。」と愛人に語ったスコウビイも、結局「人間への愛が永遠への愛を自分から奪ってしまった。」と歎かざるを得なかった。そして最後に睡眠薬をのみ下した彼は、「Dear God, I love……」と言いさして倒れる。この語られなかった love の目的語を神であるとする解釈もあろうが、むしろ何を愛するのか言い終ることができずに息絶えたスコウビイの姿に、グリーンのジレンマの象徴的なあらわれを見るべきではないか。

R・W・B・ルイスは、この人間愛と神への愛の二者択一に関してカミュ

とグリーンを比較し、カミュは「人間愛と人間への全人的かかりあい」(the love of and the whole-souled involvement with man)を選び、グリーンは「神への愛と神への全人的かかりあい」(the love of and the whole-souled involvement with God)を選んだという。⁶⁹しかし少くともグリーンの場合、一方を切り捨てて、一方のみを選んだという結論を私は下すことができない。むしろ彼はこの二つを共に選ばうとして二つの愛の間に落ちこんだのだ。このジレンマこそがグリーンの世界における「事物の核心」であり、彼の作品におけるカトリシズムやコミュニズムなどの題材、あるいは絶望や憐憫や罪意識といったテーマに対する、アンビヴァレントな、ある意味では矛盾した態度はすべてここに発すると考えるのである。

V

伝記的研究によれば、グリーン⁷⁰の宗教的熱意が頂点に達したのが1952～53年頃だというのが、同時にこの時期は、作品の中に信仰への懐疑が次第に露呈してきた時期でもあるのだという。⁶⁹しかし、グリーン⁷⁰の内的矛盾は何もこの期に始まったわけではなく、それ以前に書かれた「カトリック小説」にも内在しているのであり、ただそれが次第に表面化してきたと考えるべきであろう。1953年に書かれた彼の最初の戯曲『居間』はこうした傾向を顕著に示している。妻ある男と恋におち、男への愛とその妻への憐れみに板ばさみとなって苦しむローズに助けを求められたブラウン神父は、力になってやりたいけれども自分の口は安っぽい教理問答に縛られてしまう、ただ祈りなさいと苦しげに口ごもりながら言うばかりであった。しかし、ローズが絶望の果てに自殺した後、彼は残されたローズの恋人に次のような言葉を引用してきかせる。「我々の理性が反撥し、不安になり、絶望すればするほど、ますます確信をもって信仰は云う、『これが神だ、すべてはよし』と。」

しかし作者自身は本当に「すべてはよし」と信ずることができたのであろうか。少くともこの戯曲においては、彼が「キリスト教のパラドックス」を強調すればする程、それは説得力を欠いた詭弁に陥っていくのである。グリーンはむしろ自分自身を説得しようとして懸命になっているかのようだ。もとよりこうした努力そのものが宗教的な意味を持つということは否定できない。しかしそれが本質的にカトリック的であるとは必ずしも言えないのではないか。神への愛と、神のかたち^カに創られた人間への愛とは結局同じではないのかというグリーン^グの根本的な問いかけに対し、カトリシズムは窮極的な答を与えられなかったのではあるまいか。

かくて彼の信仰は、アンチ・ヒューマニストが本質的に非連続なものと考えた二つの愛を結びつけようとする苦しい試みによって特徴づけられることとなり、この試みの中から、グリーンのもう一つの大きなテーマである「かかりあい」の思想が表れてくるのである。この「かかりあい」（グリーン^グの作品においては *involvement* または *commitment* という言葉が主として用いられている）という言葉からは、サルトルなどのフランスの実存主義者の言うアンガジュマン (*engagement*) が連想されるかもしれない。事実グリーン自身、実存主義風なアンガジュ (*engagé*) とかデガジュ (*dégagé*) といった言葉をそのまま小説に採り入れてもいるのだが、「かかりあい」の思想は、彼独自のかたちで初期の頃から表れていたのである。

例えば1936年に書かれた短篇『地下室』（後に『落ちた偶像』と改題された）は、既にこのテーマの一端を明かに示している。「人を愛したらまきこまれるのだ。」(傍点筆者) という少年フィリップの言葉は、グリーン^グの作品における「愛」と「かかりあい」の関係を端的に表している。そしてこの言葉がさまざまに形を変えて後の作品にもつきまどってきたのである。フィリップはこのかかりあいから逃避したが、多くの作中人物は愛ないしは憐憫に動かされて、

まきこまれ、あるいはより積極的に進んで自らを commit していった。そして彼の作品におけるこの愛や憐憫は、決して抽象的な又逃避的なものではなく、以前にものべたようにむしろ何らかの「行動」に駆り立てるもの、現実の人間苦の中へ人を投げこんで行くものであったから、この commitment が宗教的なかきこもりばかりでなく、政治的社会的な参加を意味する場合も当然生じてくるのである。そしてグリーン自身の信仰の破綻が大きくなったといわれる近年になって、この「かきこもり」の思想が次第に大きい比重をもって扱われるようになると共に、サルトル風なアンガジュマンに接近し、政治的社会的領域に積極的にふみ込んで行く傾向がみられるようになった。

こうした傾向を示す代表作としては『おとなしいアメリカ人』と『喜劇役者』とが挙げられよう。インドシナ戦争に材をとった前者は、アメリカのアジア政策への厳しい批判としてジャーナリスティックな論議をよんだが、この作品の中で大きなウェイトを占めている政治的アンガジュマンは、底流となっている宗教的アンガジュマンと無関係に描かれているのではない。熱心なカトリックである刑事ヴィゴオがファウラーに引用してきかせるパスカルの「パンセ」の一節、「そうだ。しかし君は賭けざるを得ぬ。それは随意ではない。君は既に事に当たっているのだ。」という言葉は、コミュニストであるヘングの「遅かれ早かれ、どちらかの立場に立たざるを得ませんよ。人間らしくあろうとするならば」という言葉と微妙にオーヴァラップしているのである。そしてその言葉の通り、常に *dégagé* であろうとしたファウラーもまた *engagé* たらざるを得ない。そして遂に、まきこまれないという「自らの信条を裏切って」、パイル謀殺に手を貸したのも、彼がヴェトナム人への人間的な憐れみを捨てることができなかったからであった。

かくてアンガジュマンが彼の作品における新たな「人間の条件」として浮び上ってくるのであるが、この意味で「おとなしいアメリカ人」パイルの取扱い

には作者のアンビヴァレンスが明白に表れている。即ちパイルは、そのアンガジェマンが現実のヴェトナム人の苦悩への理解や憐れみからではなく、自由や民主主義といった抽象的で生煮えの大義名分から発しているが故に罰せられねばならないのだが、一方その動機がどうであろうとも、進んでまきこまれ自らの手を汚そうとする人間であったが故に、彼も又憐れみに価する存在となっているのである。この進んでまきこまれようとする人間に対する共感が、一方ではベトミンやコミュニストに対する意外な程の同情となってあらわれた。彼等は積極的にかかりあって行こうとする何らかの愛なり信念なり（それがたとえ誤っていようとも）を持っているとグリーンは見たのであろう。『権力と栄光』にみられた政治と宗教との対立はここでは姿を消しているのである。

そして1966年に書かれた『喜劇役者』においては、このかか^りあ^う信念が政治的なものか宗教的なものかは全く問題とされていないどころか、二つのものを結びつけ調和させようとする試みがはっきりと現れてきた。恐怖の反共独裁国ハイチを舞台にしたこの小説において対比されているのは、宗教的人間と政治的人間ではなく、シニカルなホテル経営者ブラウンに代表される the uncommitted と、黒人医師マジオ博士に代表される the committed である。しかし、「かか^りあ^いになる能力を失った」という根^なし草^しのブラウンもまた、この国の暗黒に目をつぶっていることができない限り、結局この国にまきこまれざるを得なかった。そしてこれらの人々がある行動に自らをアンガジェする時（それはこの作品においては現実の政治悪への抵抗というアクチュアルな形をとるが）、その信念が何であるか、その手段が正しいかどうかさえも、もはや問題とはされていないのである。作中、死んだ反政府パルチザンの為のミサにおいて、若い司祭は次の様に熱烈に説く。

「教会は世界の中にあり、世界の苦悩の一部となっています。キリストは大司祭の召使の耳を切落した弟子を咎めましたが、他人の苦悩によって暴力に

駆りたてられるすべての人に我々は心から共感するのです。教会は暴力を咎めませんが、無関心を更に厳しく咎めます。暴力は愛の表現であり得ますが、無関心はそうではないからです。」⁶⁰

ここでは human なものと divine なものとのジレンマが、アクチュアルなアンガジュマンへの同情を通じて解消してしまっている。何よりも非難されるのは、人間苦への無関心であり、傍観的態度であり、愛の欠如なのである。

かくてこの小説の終幕にあたり、死を覚悟したコミュニストのマジオ博士が、カトリックであるブラウンに呼びかける最後の手紙は、グリーンが長い作家生活の中でたどりついた一つの結論を示唆しているように思われる。(もとより作中人物の言葉と作者自身の思想とを軽々に同一視するべきではないであろうが、作中、最も高潔な人物として登場するマジオ博士の共感のこもった描き方には、博士の言葉が作者自身のアピールでもあることを伺わせるに充分なものがあると考えられるのである。)

「……私達は、あなたも私もヒューマニストです。……カトリック教徒やコミュニストは大きな罪を犯してきましたが、彼等は既成社会のように傍観はしなかったし、無関心でもなかったのです。私はピラトのように水で手を洗うよりは自分の手を汚したい。……もしあなたが一つの信念をすてたとしても、すべての信念をすてないようにして下さい。我々が一つの信念を失っても、それに代るものが必ずあります。それともそれは別の仮面をつけた同じ信念だと言うべきでしょうか。」⁶¹

本論の冒頭でふれたカトリシズムの擁護とコミュニズムへの同情という矛盾もここではもはや問題ではない。信念の名はどうであろうと、何かを信じているかどうか、そしてその根底にヒューマニズムがあるかどうかが問題なのである。そしてグリーンにとってこのヒューマニズムとは、主義ではなく、人間の苦悩に自らをアンガジュしようとする「心情」なのであった。人間の無力と本

(Zurich: Verlag der Arche, 1956) 参照

- (11) T. E. Hulme, quoted in T.S. Eliot, "Baudelaire," *Selected Essays* (London: Faber & Faber, 1969), p. 430
- (12) R. W. B. Lewis, *The picaresque Saint* (Philadelphia & New York: J. B. Lippincott, 1961), p. 267
- (13) John Atkins, *op cit.*, p. 204
- (14) Graham Greene, *The Comedians* (Harmondsworth : Penguin Books, 1968), p. 823
- (15) *Ibid.*, p. 286 (傍点筆者)